

＜巻頭言＞

第5巻第1号の発刊にあたって

山田礼子
同志社大学

このたび、『初年次教育学会誌』第5巻第1号を刊行する運びとなった。学会誌を発行するに当たっては、編集委員長、副編集委員長をはじめ編集委員会の皆さんには大変な編集作業に当たっていただき、心から感謝をする次第である。

今号には、研究論文、事例研究論文の計4本の投稿があったという。投稿本数が減少気味と聞いているが、まことに残念な限りである。初年次教育学会の会員数も個人、機関および賛助会員の区別なく順当に増加していることは喜ばしいことだが、一方で、会員のニーズや関心の対象も多様になってきているのではないか。そうした多様化が投稿本数の減少に関連しているとすれば、学会としても真摯にこれからの学会の在り方や会員のニーズを掘り起こしながら、学会誌への投稿の増加へとつなげていきたいと切に願っている。

学会設立から5周年となる2012年の学会では、学会員が初年次教育のどのような領域に関心を持っているのか、あるいはどのような研究あるいは実践課題を深めていきたいのか等々についての会員調査を実施した。今後は、会員からの回答を集計・分析しながら、これからの学会の方向性にも反映させていきたい。

2012年9月5日・6日に文京学院大学で開催された第5回大会では、従来から継続的に行ってきたワークショップの内容に加えて、ピアサポートやアクティブ・ラーニングに関連する手法等の新たな内容が加わった。自由研究発表にも、グループワークやピアサポートあるいは分野別での初年次教育等をはじめとする多様な内容が反映されるようになってきている。大会校が企画・運営するシンポジウムにも、初年次教育の分野ならではの正課外教育を通しての学生支援といった特徴が見事に反映されていた。

中教審答申が8月に公表され、大学教育の質的転換が求められている。学士課程教育を充実させ、学生を自律的かつ深い学びに関わらせる。そうした大学教育の質的転換の起点となるのが初年次教育である。その意味でも充実した研究成果と実践を積み重ねていくのが本学会の課題でもあり、寄せられている期待でもある。学会としてこうした期待に応えていきたいと心から願っている。

(初年次教育学会会長)